

逸脱性および空間的距離の操作による無害逸脱理論の検討

三 好 理 央

無害逸脱理論とは、ユーモアの生起における認知的な必要十分条件についての仮説である。この必要十分条件とは、a) 何かが逸脱であると評価される、b) 何かが無害であると評価される、c) それらの評価が同時に並置される、という3つである。

本研究では、この理論より導かれる仮説「刺激の逸脱が大きく心理的空間距離が遠い場合および逸脱が小さく心理的空間距離が近い場合に“逸脱と無害の認知の並置”が生じ、刺激の逸脱が大きく心理的空間距離が近い場合および逸脱が小さく心理的空間距離が遠い場合よりもユーモアが強く喚起される」を検証することを目的とした。

そのため、物理的空間距離を変化させることによる心理的空間距離の操作を試みた2つの実験を行った。実験1では逸脱的写真刺激に対する心理的空間距離（近・遠）の効果について、実験2では写真刺激の逸脱度（小・大）と心理的空間距離（近・遠）の組み合わせの効果について検討した。

結果、まず、物理的空間距離の変化による心理的空間距離の操作は失敗した。次に、仮説は支持されなかった。そして、逸脱性ではなく意外性または非典型性の認知が無害さの認知とともにユーモア生起を説明した。

しかしながら、本研究では、実験の統制・操作に失敗している。また、各概念の定義・関係性を再検討した上で手続き上の分離を行うことが求められる。その上で、様々な研究を組み合わせ、ユーモア生起のより詳細な過程を明らかにしてゆくことが今後の課題である。